

56 ハーバード大学図書館に残るヘボンの書簡

高安伸子

演者は一八九四年に米国ハーバード大学のホートン図書館 (Houghton Library) において、アメリカン・ボード・ミッション (American Board of Commissioners for Foreign Missions) の宣教師たちがミッション本部に書き送った報告書を閲覧する機会を得た。この図書館には、ベリー (J.C. Berry) らの日本に派遣された宣教医たちがミッション本部に書き送った、日本における活動報告書も多数、所蔵されている。

ベリーらの書簡は膨大な量であり、厳重な管理のもとに保管されているため限られた時間での閲覧では、総てに目を通すことは不可能であった。しかし、アメリカン・ボード関連のファイルの中にヘボン (J.C. Hepburn) がベリーに宛てた書簡があることを見つけた。

ヘボンがベリーに宛てたこの書簡の日付は一九〇四年八月二四日で、隠居していたイーストオレンジから出されている。この時、ヘボンは手紙の中で「自分も九〇歳を迎えた」と記しており、日本での活動を終えて帰国したのが一八九一年であるので、隠居生活も十三年が過ぎた時期である。

このハーバード大学ホートン図書館所蔵の手紙は現在まで、未発表である。晩年のヘボンの心境も含め、手紙の内容概略と宣教医について報告する。

冒頭でヘボンはベリーからの突然の手紙に驚いた様子を見せ、そして、三〇〇ワードでヘボンの宣教医としての経験をまとめて欲しい、というベリーからの依頼に対してどのようにまとめたらいのか、と記している。その後、ヘボンは自身の思う「宣教医の仕事とは」という点について述べ、自身のアモイおよび日本における宣教医としての活動の概略を記している。

なかでも、演者が注目したのはシモンズ (Duane B. Simmons) の活動について、ヘボンが大きな評価を与え、またシモンズの人柄について賛辞を送っている点であっ

た。シモンズはオランダ改革派教会 (Dutch Reformed Mission in America) 所属の宣教医としてヘボンと同時期に来日しながら、短期間でミッシェンを離脱した人物である。

ペリーがどのような内容の書簡をヘボンに送ったのかは不明である。このヘボンの手紙の内容から推測すると、ヘボンの宣教医としての活動履歴を尋ねたと思われる。ペリーは各ミッシェンから派遣された宣教医たちの日本での活動をまとめるつもりで、ヘボンに対しても久々に手紙で依頼をしたものと考えられる。

ヘボンがペリーの意図を知りつつも開国直後の日本において重要な活動をした外国人医師として、短期間でミッシェンから離脱したシモンズを挙げ、シモンズに対して賛辞を送ったとするとペリーとヘボンの「宣教医の役割」という点において、かなりの相違点が生じていたと推測される。ペリーとヘボンとは、一八八〇年代のキリスト教全派合同で運営する医学校(同志社医学校)設立計画などで、日本滞在中にも意見の相違があったということが『ヘボン書簡集』の記述から明らかになっている。

ハーバード大学ホートン図書館に所蔵されたヘボンの書簡の内容と、日本における宣教医たちの活動内容を照らし合わせることにより、ヘボンとペリー、ヘボンとシモンズという医師たちの交友関係その他が浮かび上がるように思われる。今後も継続して調査を行っていきたい。

(順天堂大学医学部医史学研究室)